

機能シラバスから見た”Japanese for College Students” ー日本語教授法受講生のコメントからー

稲垣 滋子

1. はじめに

97年秋学期に「日本語教授法Ⅰ」の授業の中で”Japanese for College Students: Basic 1,2,3”を取り上げ、目的、構成、内容などの面から分析した。ここでは、この教科書の一つの柱である機能シラバスの観点から、学習者に合っているか、日本語の機能を習得するのに適切なモデルが示されているかを中心に述べることとする。

本稿では、教授法の学生へのアンケート調査9通と、授業中に学生が行った分析報告を資料とする。

調査の結果を見ると、教授法の学生たちはおおむねこの教科書を学生によく合っている内容と構成であると評価しているが、「自然な日本語」という観点からは多少批判的であり、また文法から入らない点に疑問を覚えたようである。

2. アンケートの内容

アンケート調査用紙は本稿の末尾に添付したので実際の質問文はそれを参照していただきたいが、質問の主旨は次の通りである。

質問1：この教科書が、現在JLP (Japanese Language Programs) を取っている学生に合っているか

質問2：1課の構成は適切か

質問3：各セクションについてのコメント

質問4：この教科書の日本語は、現代日本語の話し言葉のモデルとして適切か

質問5：ドリル、ロールプレイ、Reading の話題や場面についてのコメント

質問6：取り上げられている文法項目は、初級で扱うものとして適切か

質問7：その他

以下では、質問1、2、4、5を取り上げ、学生のコメントと筆者の考察を述べる。

3. 学習者に合っているか（質問1）

質問文「クラス見学やチューターをした経験から考えて、全体の印象として、この教科書は今のICUのノン・ジャパの学生に合っていると思いますか。」

9名の回答は、選択肢4つのうち、
よく合っている 2

まあまあ合っている	7
あまり合っていない	0
合っていない	0

であった。多少の疑問はあっても、大体合っていると見ていることがわかる。

上のような回答をした理由については、「よく合っている」と答えた2名は、「初級に必要な基本文型が網羅されている」「日本語と英語の発想法の違いがおさえられている」(選択肢では「その他」)と書いている。また「まあまあ合っている」と答えた7名のうち4名がその理由についての選択肢から、次のように答えている。

むずかしすぎる	1
やさしすぎる	0
学生の背景や学習目的に合わない人がいる	3

3番目の選択肢は日本語としておかしいが、回答者はこちらの意図を汲み取って答えてくれた。学習者の背景・学習目的・学習スタイルなどが多様であるため、いろいろな点を考慮して作った教科書でも、すべての人に合っているとは言えないと感じられたことがわかる。

4. 教科書の構成は適切か(質問2)

質問文「1課の構成(Objectives, Points, Sentences, Expressions, フォーメーション、ドリル、ロールプレイ、Grammar Notes, Reading, Writing)は適切だと思いますか。」

9名の回答の内訳は次の通りであった。

適切	5
適切とは言えないところがある	4

このように回答が割れた。続いて、「適切とは言えない」と思う人に理由を問うたところ、「Grammar Notes がフォーメーションの前にあった方がわかりやすい」「Grammar Notes に説明がきちんとされているのはよいが、フォーメーションの前でも少し説明があるとわかりやすい」「ObjectivesとPointsの違いが明確でないところがある。2つをまとめてもよいのではないか」のような記述があった。

なお、Grammar Notes の位置については、「適切」と答えた1名も前の方にあるとよいと書いている。この点に関しては教授法の授業中に意見交換をしたが、「まず文法から」という固定観念が、これまでの外国語学習によって学生たちの頭の中にできているのではないかと思われた。全員がICU生で、9月入学者以外はELPを経験しているはずであるのに、そしてELPのすべてのクラスが文法中心であるとは思えないのに、入学以前の学習、あるいは第二外国語の学習の影響が大きいと言わざるをえない。また、海外での日

本語教育の中にも、文法の説明に多くの時間を費やす教師があること、学生の中にもそれを求める者が多いことなどの情報も得ている。このことは外国語教育のニーズと教育方法に関する重要な課題であり、改めて検討する必要がある。

5. 機能シラバスの観点から（質問4）

今回のアンケートでは、初級に必要なコミュニケーション機能がじゅうぶんに盛られているかどうかという質問はしなかった。その理由は、2学期続く教授法の最初の学期であることから、まずICUで使っている教科書を材料にして、学生に日本語教科書の1つの型を把握してもらいたいためである。2学期目になって、広くいろいろな教科書の分析をし、その過程で、どんなシラバスが教科書の中にどのように実現しているかを理解するようにしている。その段階で、理論上で学んだ機能シラバスと実際との関連を論じることができると考え、このアンケートでは、表現意図が、自然な日本語として表れているか（質問4）と、話題・場面が適切かどうか（質問5）を問う形にした。

質問文「この教科書に使われている日本語は、現代日本語の話し言葉のモデルとして適当だと思いますか。」

9名の回答は次のようであった。

ちょうどよい	1
大体よい	6
不自然な表現がある	2
大いに問題である	0

この回答からは「大体よい」が大勢を占めることがわかるが、続いての質問、「どれに○をつけた人も、どんな表現がそうなのか、例をなるべくたくさん挙げて説明してください。」に対しては、選択肢別に明確な違いのあるコメントは得られなかった。そこで、以下には、回答者すべてのコメントをいくつかに分類して紹介することにする。

(1) 全体的なこと

①口頭語と書き言葉、また学生言葉と一般的な言い方とが違うため、教科書にどれを載せるかは難しい。

②日本語の文法に組み込まれた日本語に特徴的な発想法・表現法がうまく織り込まれて説明されている。要点はほぼ網羅されているが、一つ、スル型表現とナル型表現の解説があまりないように思う。

(2) 口頭表現の場合、どのレベルの丁寧さ・自然さを提示するのがよいかについて

①～じゃありません、～じゃありませんでした

・抵抗感がある。なぜ「～ではありません」「～ではありませんでした」ではいけないのか。「じゃない」ならかまわない。

- ・丁寧語と口語が混在していると感じた例の一つ。「そうじゃない(よ)」「そうではありません」と分けて教えたかどうか。この場合、インフォーマルなものは参考程度に紹介する。

②ええ (Yes)

- ・中には「はい」の方がふさわしいところがある。旧情報(単に肯定を表すとき)は「ええ」でもよいが、新情報を付加するときは「はい」の方が自然。

(3)文法事項との関連

①ポライトネス

- ・～てください (polite request L.9)、～させてください (目上の人に対する polite request L.29) は丁寧な命令形のニュアンスがある。目上の人に対する polite request なら、「～てくださいませんか」「～させてくださいませんか」とする必要がある。

また、「おーVください」との使い分けの説明が不十分。

②形容詞+です

- ・違和感がある。自分は通常「形容詞+のです」を使う。
関連して、「～んです」は、です体のときは「のです」ではないか。

③テニスができます

- ・必要な表現であるが、話し言葉としてはあまり使わない。

これらを見てわかることは、教授法の学生はこの教科書にはくだけた表現が多いと感じているということである。その最も大きな理由は、(2)の①②にあるように、「です・ます」体がフォーマルな感じであるのに、「では」でなく「じゃ」を使うこと、「はい」でなく「ええ」を使うことにあると言える。教室での討論の際にもこの問題は関心を呼び、「じゃ」「ええ」肯定派よりも否定派の方が声が大きかった。この点に関しては、筆者も共感を覚えるところがあった。

しかしながら、この点以外にも、(3)の②、「形容詞+んです」にも抵抗のある人が少なからずいて、母語としての日本語に対する文体的な分析がまだできていない学生もあることがわかった。

語感という点では、同じ日本語話者でも一人一人が異なっており、個人の語感と教育面で取り上げるべき表現形態との関連をさらに追究する必要があるところである。

6. 話題・場面について(質問5)

コミュニケーション機能の要素である話題と場面が、この教科書では適切に設定されているかどうかを問う質問である。

質問文「この教科書のドリルやロールプレイ、Reading で扱われている話題と場面に
ついてどう思いますか」

選択肢2つについての9名の回答は次の通りである。

おおむね適切である 7

改善の余地がある 2

これらについて説明を求める設問に対しては、次のようなコメントがあった。

「適切」とした人のコメントには、「日本の生活に関する内容がある」「学生が興味のあるトピックや、日本に来て直面する問題（カルチャーショックやアパートさがし）について扱われているので、自然に身についてよい」「日本の文化、時事問題など適宜に取り入れられている」などがあった。また、適切だとした人の中にも、「具体的な事物を扱っているので、数年たつと社会状況や流行が変化したりして古くなり不適切になるものも出てくるだろう（バレンタインなど）」のように、将来の見直しを期待する声があった。

「改善の余地がある」とした人のコメントには、「インフォーマルな場面にかたよっている」「皇后についての話題はむずかしすぎた」「ICU以外の場所で使うのはむずかしい」などがあった。

これらの指摘は、教科書をよく理解していることを示している。

7. おわりに

以上の結果から、教授法の学生は、この教科書を肯定的に評価しているが、なお改善の余地があることも指摘していることがわかった。多少批判的なところがあるとすれば、それは構成面と、日本語の自然さである。今後の検討課題として重要な点であると思う。

今回の調査では母数が少なく、数量的な分析はできなかったが、記述されたコメントを見ると、学生生活を体験している中で、日本語学習者との交流を持ち、日本語クラスを見学したことから教科書を評価していることがわかる。教科書編纂に当たっては、日本語学習者のニーズだけでなく、日本人学生の意識も参考にする必要がある。もちろん先述のように、まだ日本語教育全体を見通す機会がないこと、日本語についての認識が不十分などところがあることなど、注意しつつ扱わなければならないが、日本語学習者に近い視点を持つ点で、教師とはまた違った利点を有していると言えるであろう。

最後に、教授法の授業において教科書分析をどう位置づけ、どう進めたらよいかについて、今回の授業と調査から導かれる結論を述べたい。

教授法の授業で、教授法の理論面、教科書分析、授業見学を同時進行させている。このため、教科書分析も最初は部分にとらわれ、実際の授業での重点の置き方、理論的根拠、教授法などを知らないままで行っている。そこで、時間はかかるが、理論→授業見学→第一次教科書分析→理論→授業見学→第二次教科書分析というように、スパイラル方式で行

い、その都度議論していくのがよいと思われる。できればこの過程に模擬実習も組み込むとよい。

このようなサイクルで進めていけば、今回学生たちが指摘した、文法の位置づけ、表現の自然さ、場面設定などを、より具体的な知識や経験に基づいて考えることができるであろう。